

ようこそ、過疎の山あいへ！自然体験「ヤマナビキャンプ」を開いて感じたこと



第1回ヤマナビ
キャンプの様子
＝2024年7月
(以下、本文中
の写真はプライ
バシー保護の観
点から一部を加
工しています)

私たち山学では昨夏、岐阜県本巣市の中山間地で、子どもたち向けの自然体験「ヤマナビキャンプ」を企画して開いた。過疎化が進む山あいにおいて、普段は主に地域「内」の子どもたちにスポットライトを当てた取り組みをしているが、地域「外」の子どもたちにも、この地の自然の豊かさを感じてもらいたいとの思いで開催した。今年の夏休みには第2回のヤマナビキャンプを計画している。

子どもたちにとって、親元を離れて自然の中で過ごした1泊2日はどんな経験になったのか。少子化が進む地域にとって、子どもたちが集うキャンプはどんな意味があるのか。当日の様子を振り返りつつ、その意義を考えてみたい。

■ローカル線に流しそうめん、川遊び、虫捕り…キャンプの中身

第1回ヤマナビキャンプは2024年の夏休み、本巣市北部の根尾地域にあるキャンプ場を舞台に開いた。本巣市教育委員会の後援を得て、市内の小中学校を通してチラシを配布し、小4～中1の男女14人が参加した。

初日は、市内を走るローカル線・樽見鉄道でキャンプ場まで移動するところからスタートした。いずれも市内在住の子だが、このローカル線に乗って山深い方へと向かった経験がある子は多くない。車窓から見える山々にカメラを向けたり、鉄橋下を流れる根尾川をのぞき込んだりする姿が印象的だった。約30分の車内で、もともと友だち同士ではない子たちも少し打ち解けた雰囲気になった。



キャンプ場に到着したのはお昼前。簡単にオリエンテーションを済ませた後、昼食は流しそうめんをした。竹は1週間ほど前、実際にスタッフで伐採し、輪切りにして節を削り取って準備をしたものだ。そうめんのほかに流したミニトマトやカットフルーツも子どもたちには人気だった。

昼食後は、キャンプ場のすぐわきを流れる根尾川へ。夏本番という日差しの中で、ライフジャケットを着て川遊びを楽しんだ。水をかけ合う子がいれば、ヨシノボリ※やおたまじゃくしを夢中になって探す子もいた。川から上がった後は、みんなでスイカ割りにもチャレンジした。
※海水の混じる汽水域から淡水域に棲む小魚の総称。スズキ目ハゼ科ヨシノボリ属に分類される魚のこと



夕食は手づくりのカレーをとり、最寄りの温泉施設での入浴を終えた後、就寝前にもう一つアクティビティを用意した。本格的なライトトラップを使った昆虫採集だ。真っ暗になった夜のキャンプ場に白いシートを広げ、大型の投光機でライトアップした。昆虫はやはり子どもたちに大人気で、光に集まってくる昆虫を競うように捕まえていた。



キャンプ2日目は、朝から登山に向かった。挑んだのは、岐阜県と福井県にまたがる標高1,617メートルの能郷白山。お弁当を詰め込んだリュックを各自背負って登った。ロープではい上がるような場所や、足元の石がぐらつくような場所もあり、子どもだけでなく大人にとってもなかなかハードな山道だった。2時間超をかけ、11人が登頂。皆くたくたになりながら下山し、2日間のキャンプは終わった。

■「夢中になれること」「助け合うこと」

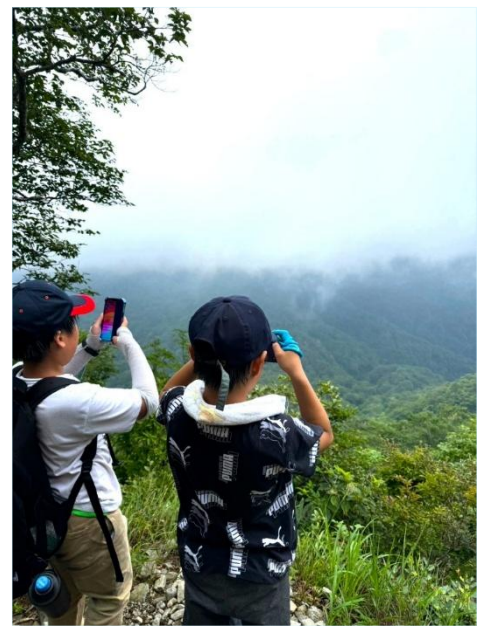
自然の中での1泊2日は、子どもたちにとってどんな経験になっただろうか。子どもたちの様子を見ながら、感じたことが二つある。

一つは、子どもたち自身が「夢中になれること」に気づくきっかけになり得るということだ。

参加者の中に、普段は特別支援学級に通う子がいた。事前に保護者の方から「不安やストレスに弱く、気持ちが落ち着くのに時間がかかる特性がある」と連絡をいただいていた。その連絡の中には、「(案内チラシに掲載していた活動内容が)大好きな活動ばかりで、子どもから参加したいとの希望があった」「親としても、これをきっかけに情緒の成長ができればとの思いで応募した」といったことも書かれていた。

キャンプにやってきたその子は、ヨシノボリの採集に夢中になった。ゴーグルで水中をのぞき込み、川底をほうヨシノボリを小さな魚とり網でひたすらにすくい取っていく。虫かごいっぱいになるまで捕まえると、本当に満足そうな笑顔を見せてくれた。

時間や空間の制約がなく、自分の世界に思う存分入り込むことができたのだろう。キャンプの後、保護者の方からは「とても楽しく過ごせたようで、帰り道、キャンプでの出来事をたくさん話してくれました」とご丁寧に連絡をいただいた。自然の中で、自らが夢中になれることを改めて認識できる機会になったのではないだろうか。



もう一つ感じたのは、「助け合うこと」の大切さに気づくきっかけにもなったのではないかということだ。

標高 1,600 メートル超の登山は、子どもたちだけでなく、大人にとってもなかなか苦しかった。過酷さゆえにだんまりとしてしまいがちだが、子どもたちは違った。大変そうな子に声をかけたり、歌を歌ったり、しりとりをしたり。自分自身がしんどくても他者を気にかけ、一緒に楽しく困難を乗り越えようとする姿があった。足を擦りむいた子に、

ばんそうこうを差し出す子もいた。

誰に言われるでもない、おのずから表出した思いやりに思わず感心した。自然の中で過ごすということに、子どもたちの中にあるやさしさを引き出す力があるのではないかと感じさせられた。

■地域にとってのメリットは？ 課題は？

こうしてみると、子どもたちによる自然体験は、その舞台となる地域の側にとってもメリットがあると感じる。そこで暮らす人たちにとっては当たり前の山や川、生き物が、外部からやってくる子どもたちにとっては魅力ある資源に映るということを、再認識する機会になるからだ。



私自身もこの中山間地で暮らす身だが、どうしても日常的には、街なかに比べての不便さや寂しさ、そして「ここにはないもの」に目がいてしまうことが多い。そんな思いもある中で、子どもたちが見せてくれた笑顔は、豊かな自然に囲まれたこの地域を大切にする意義を改めて感じさせてくれた。

このキャンプでは、地域の在住者や出身者、この地にかかわる人にボランティアスタッフとしてお手伝いをいただいた。そうした方々にとっても、地域のよさを再認識する機会になったのではないかと感じている。

山学メンバーには、こうした自然体験キャンプを少しでも地域のにぎわいにつなげていきたいという思いがある。だが、市内の子だけを集めた年1回の単発イベントでは、にぎわいにまでは結びつかない。

市外・県外にも参加を呼び掛けられる継続的なイベントとしていくには課題も多い。

この第1回キャンプは、スタッフは完全ボランティアで、それでも収支は赤字だった。高額な参加費に設定して、参加にハードルが出来るようなイベントにはしたくない。いかに運営資金を確保するのが大きな課題となる。

また、子どもたちの安全面をしっかりと確保していくために、十分な人数のスタッフ（大人）も必要不可欠だ。特に川遊びでは、子どもたちが安全に遊べる浅瀬をスタッフがぐるりと取り囲むように見守った。男の子も女の子も安心して参加できるよう、スタッフも男女それぞれがいなければならない。

さらに、多くの子どもたちが自然の中で寝泊まりすることの「不便さ」に慣れていないことも、実際にやってみてわかった課題だ。「クーラーがなく、暑くて寝られない」「虫が怖くてトイレに行けない」。自然体験には付きものの不便さだが、受け入れ側としてどこまで設備・体制を整えていくのかということも、今後の検討事項として残った。

いくつもの課題に気づくことができたのも、まずは第1回のキャンプを無事に終えることができたからだ。そうした課題を上回って、この地で自然体験の場を提供していくことの意義も実感することができた。

子どもたちにとっては、自然の中で好きなことに夢中になったり、仲間と助け合ったりする経験が、心に残る「生きた学び」となる可能性がある。また地域にとっても、外部の子どもたちが訪れて楽しんでいく流れが生まれることで、過疎の山あいの魅力を再発見する契機になりうる。

今夏も経験値を積み上げ、山あいににぎわいをもたらすキャンプイベントにしていければと思っている。